

セーラ・クルーに見られる理想的な女性のイメージ

Sara Crewe as a role model for girls

西田 梨紗¹

¹大正大学大学院 (博士後期課程在学中)

Risa Nishida¹

¹Advanced Literary Studies, Graduate School of Taisho University (Current)

3-20-1, Nishi-Sugamo, Toshima-ku, Tokyo, 170-8470 Japan

キーワード：アメリカ文学，フランシス・ホジソン・バーネット，女性学

Key words：American literature, Frances Eliza Hodgson Burnett, Woman's studies

抄録

1905年に出版された、バーネット (Frances Eliza Hodgson Burnett, 1849-1924) が執筆した『小公女 (A Little Princess)』¹の舞台は19世紀後半のロンドンだ。当時のイギリス社会では社交におけるルール²が存在し、階層の違いは文化、言葉、価値観の違いでもあった。ミンチン女子学院においても生徒と使用人の間には目に見える隔りがあり、生徒もそれを意識している³。これらを踏まえると、学院の使用人とも親しく接する主人公セーラ・クルーの振る舞いは注目に値する。

クルー大尉がセーラについて「困っている人を見ると、必ず戦ってあげたくなるんだ」(バーネット 27頁)⁴と考えていると、ナレーターが述べているように、セーラは薄情者や道徳心に欠ける者には苛立ちを覚える。それは、アーメンガード・セントジョンのフランス語の失敗を笑うジェシーやラヴィニア・ハーバートに対する、セーラの怒りにもいえよう。

とりわけ、セーラが反感を抱くのはマリア・ミンチンだ。セーラはこの教師の支配下に置かれ、飢えや寒さに襲われながらも、学院の使用人として過酷な労働に従事する。セーラはミンチンの命令に従っているが、この女教師の面目を意図せずにして最終的にまるつぶしにしてしまう。

セーラは出版当時のイギリスで理想とされていた良妻賢母型の女の子である一方、ミンチンは未婚でかつ冷徹な女性である。この二人の性格の違いを念頭に置きながら、『小公女』のクライマックスに着目すると、この本では少女たちが指針とすべき女性像について教訓的に教え説かれているのではないかという結論を導き出した。

本稿における『小公女』の引用の翻訳は畔柳和代による。

1. “very fine little person”⁴

セーラには愛情や思いやりが備わっていることは、作品を通してナレーターの補足説明からも分かる。ナレーターは、ミンチン女子学院で特別な待遇を受けるセーラについて、「セーラが違う性質の子だったら、セーラが独りよがりで威張る子だったら、これほど甘やかされおべっかを言われた結果、鼻持ちならない嫌な子になったかもしれない。セーラが怠け者だったら、何ひとつ学ばなかったであろう」(バーネット 37頁)⁵と述べてい

る。また、ナレーターが、女中のマリエットにお礼を言うセーラを魅力的 (charming) と述べ、この少女を「立派な小さな人 (“fine little person”)」と表現する (バーネット 19頁)⁶箇所にも、セーラの人の善さを窺える。ナレーターはセーラの言動に作品を通して補足説明を加え、この少女の性質について読者に詳しく説明している。

ナレーターからも評価の高いセーラであるが、この少女は自分が本当に善い人であるのか、時おり悩んでいる。友人のアーメンガードにその胸の内を告げる場面がある。

「物事はたまたま人に降りかかるのよ」とセ

ーラは言うのだった。「私にはよい偶然がたくさん起こったの。小さいときからたまたま授業や本が大好きで、何かを習えば覚えることができた。生まれてきたのがたまたまハンサムでやさしくて賢くて、好きなものを何でも与えてくれる父のもとだった。もしかしたら、本当は機嫌のいい子じゃないかもしれないのよ。でも望むものがなんでも手に入って、誰もが親切にしてくれたら、ご機嫌じゃないなんてことありえる？」セーラは真剣な顔をして。「どうすれば自分が本当はいい人なのかひどい人なのか、わかるのかしら。私はもしかしたらおぞましい子で、そのことを誰も知らないで終わるのかもしれないのよ。私に試練がぜんぜん降りかかってこないというだけの理由で」(バーネット 38 頁、下線は引用者) ¹¹⁾

上述の引用によって、セーラは自分の賢さや機嫌の良さを偶然の積み重ねとして捉えていて、本当の自分はおぞましい子 (a hideous child) なのではないかと考えていることが分かる。セーラの良い性質を認めているナレーターも、セーラは天使ではなかったし... (バーネット 70 頁) ¹²⁾と述べているし、立派なかんしゃく持ちであることも明かしている (バーネット 28 頁) ¹³⁾。確かに、苛立ちを覚えるセーラの姿は作品の所々でみられる。この少女が他の人と違うのは非常に聡明であるために怒りの原因を把握し⁵⁾、あるいは自らをプリンセスと思い込むことで、どのような境遇に陥っても気高く振る舞うことができる点だ。これからみていくように、セーラは孤児となり、使用人に身分を落とし、彼女の持つ性質の善し悪しを試すかのような試練が次々に降りかかる。

ミンチン女子学院での華やかで楽しい生活に終止符が突然にして打たれ、セーラに試練が訪れたのは 11 歳の誕生日パーティーの最中であった。父が亡くなったこと、そして父が残した遺産はなく、無一文の孤児になったという現実を突きつけられた。ミンチンはセーラに多額の投資をし、並々ならぬ気遣いをしてきたために、この報せを受けた直後に怒り狂い、パーティーを中断させ、この生徒の持ち物を取り上げた。ミンチンはセーラに、慈悲 (charity) で学院の使用人として置いてやることを告げ、屋根裏の一室を与えた。セーラは喪失

感や悲しみを抱くものの、感情を胸の内に抑え、現実に立ち向かう。セーラを取り巻く環境は急変して、飢え、寒さ、孤独、疲労が小さな身体に襲いかかる。だが、彼女は与えられた仕事を忠実にこなし、前向きに生きる。

ここで着目したいのは、特別寄宿生として優遇されていた時と変わらない優しさや愛情深さをセーラが持ち続けている点だ。セーラは使用人となっても、幼い甘えん坊のロッチェ・リーと不器用なアーメンガードの学院生活を手助けし、同じ立場にあるベッキーと励まし合う。それだけでなく、自分よりも恵まれない状況にある人に自らを差し置いて、救いの手を差し伸べている。セーラは空腹を常に感じていたが、寒い日に道で発見した 4 ペンスで購入したパンを乞食の少女アンに惜しみなく分け与えている (バーネット 189-191 頁) ¹⁴⁾。セーラにとって、4 ペンスを見つけた直後のアンとの出会いも「プリンセスか否か、自分に対して証明してみせるきっかけ」(バーネット 183 頁) ¹⁵⁾であったと解釈できる。

『小公女』を読む上で着目すべきなのは、セーラの性質の善し悪しを試すかのように次々と起こる試練である。セーラは学院の特別寄宿生であった時、自分が親切でいられる理由を試練がぜんぜん降りかかってこないからだ、アーメンガードに話していた (バーネット 38 頁) ¹⁶⁾。この台詞は、アーメンガードがセーラと仲直りをしようと屋根裏部屋を訪れた場面での「**逆境は試練を与えるの。私の逆境があなたに試練を与えて、あなたがどんなに良い人か証明したんだわ**」(バーネット 122 頁) ¹⁷⁾というセーラの台詞にも通じる。

父の死後、セーラには数々の試練が降りかかり、彼女の性質の善し悪しを量るかのような困難に直面する。その度に、セーラは優しさや愛情深さを読者に証明するのである。

2. “I can be a princess inside”⁶⁾: セーラ・クルーとマリー・アントワネット

セーラはプリンセスに憧れを抱くばかりでなく、自分をプリンセスだと思いついてしまう。彼女のこの思いは自らの内に潜むだけではなく、他者からも認められている。例えば、第 2 章「フランス語の時間」では、マリエットが女中の立場にある自分にも礼儀正しくお礼を言うセーラについて「**あの子は王女のようにだ** (“Comme elle est

drôle”）」(バーネット 19 頁) ㉑と評価している。また、第 6 章「ダイヤモンド鉱山」では、セーラは「プリンセス・セーラ (“Princess Sara”）」(バーネット 72 頁) ㉒とクラスメートから呼ばれている。

本章では、内面のゆたかさをプリンセスと考えるセーラと華やかな暮らしぶり知られているフランス王妃アントワネット (Marie Antoinette, 1775-1793) の接点がどこにあるのかを明らかにしていく。まずは、セーラが理想としているプリンセス像を確認する。以下に挙げる箇所では、セーラの考えるプリンセスとはどのような存在かが、セーラ自身によって語られている。

「もしも私がプリンセス——本物のプリンセスだったら」とセーラはつぶやいた。「民衆にお金や物を与えることができるのに。でも、真似事のプリンセスにすぎなくても、人のためにできるささやかなことなら作り出せる。いまみたいなことなら。あの子は、私が贈り物をしたみたいに喜んでくれた。これから先、人が喜ぶことをするのは、大勢にほどこしをすることだと思うようにしよう。私は大勢に贈り物をしたんだわ」(バーネット 64 頁) ㉓

セーラの部屋を掃除する途中で疲れ果てて眠るベッキーをセーラは気遣い、この少女が目覚めるとケーキを切り分け、人魚のお話の続きを語る。上述のセーラの台詞は、ベッキーが去った後、テーブルの端に腰かけている時の胸の内である。ここに記されているように、セーラが考えるプリンセスとは、人にお金や物、施しを与えるといったように、弱い立場にある者を思いやる存在なのだ。

セーラにとってプリンセスが内面の在り様とかわかることは、ガートルードから聞いた話をジェシーがラヴィニアに伝える台詞からも分かる。

「実はそうなの。あの子がしている真似事に、プリンセスごっこっていうのがあるの。あの子はずっとやっているのよ——学校でも。そのほうが勉強も身につくんですって。アーメンガードも誘っているけど、太りすぎてから無理って答えているらしい」「本当に太りすぎよ」とラヴィニアは言った。「セーラはやせすぎ」当然ジェシーはまたくすくす笑った。
「あの子が言うには、見た目も持ち物も関係

ないのよ。関係があるのは、何を考えて、いかに行動するかだけ」(バーネット 66-67 頁、下線は引用者) ㉔

この引用から、セーラがプリンセスごっこを日頃からし、その目的は気高い振舞いに努めることであり、生徒間でもセーラのこうした考えが知られていることが分かる。セーラが転校してきた当初、生徒たちはセーラの身に付けている高価で煌びやかな持ち物に魅せられるが、セーラの内面のゆたかさにも惹かれてゆく⁸。そして、この少女の内面のゆたかさにプリンセスが重ねられるようになる。

セーラは善い行いとプリンセスを結び付けているが、彼女が理想とする歴史上のプリンセスはいるのだろうか。『小公女』に名前が挙がるプリンセスは、第 11 章「ラム・ダス」中のマリー・アントワネットだけである。ここで、アントワネットについて簡潔に述べると、この王妃は宮廷の女性たちのファッションの手本となり、豪華絢爛な暮らしぶり知られていた。その暮らしぶりは民衆から反感をかい、フランス革命の中心的人物として処刑される。アントワネットはルイ 16 世 (Louis XVI, 1754-1793) を裁判で擁護し、夫に従う妻の立場を貫いた (ドラレクス 206 頁) ㉕ように、夫を敬う妻としての顔ももつ。この王妃についてみていくと、セーラとアントワネットの共通点はどこにあるのかという疑問が残る。

この問いを考える前に、『小公女』の所々に織り込まれているフランス革命に関する言葉に着目していきたい。第 6 章「ダイヤモンド鉱山」では、バスチーユの囚人について言及されている。ロッチェが仲間たちと遊んでいる間、セーラは本を読み、バスチーユにいる囚人たちの悲惨な状況の記述に没頭している (バーネット 68 頁) ㉖。恵まれた環境にあるセーラは、本に記されているバスチーユの囚人たちの暮らしぶりに胸を痛める。第 15 章の「魔法」では、カーライル (Thomas Carlyle, 1795-1881) の『フランス革命 (The French Revolution: A History)』(1837) が挙げられている。父から『フランス革命』が送られてきたものの、内容を理解できずに悩むアーメンガードに、セーラは「前からとっても読みたかったの！」(バーネット 207 頁) ㉗と話す場面にもいえるよう、フランス革命に深い関心を寄せているのは確かだ。

注目したいのは、セーラがバスチーユの囚人と

自分を重ねる第 8 章「屋根裏部屋にて」の以下に挙げる台詞だ。

「あそこなら真似事にぴったり。私はバスチーユの囚人よ。ここにもう何年も何年も——何年もいて、もう誰も私を覚えていない。ミンチン先生が看守で——ベッキーは——瞳のきらめきに新たな光が差した——「ベッキーは隣の房の囚人」(バーネット 121-122 頁)^[1]

この引用は、セーラが屋根裏部屋での暮らしの辛さや、過酷な労働の苦しみによる疲労感をイメージネーションで紛らわせながら語る台詞である。ミンチン女子学院をバスチーユに喩え、ミンチンを看守に喩え、ベッキーは隣の房の囚人に喩えられている。前述したとおり、セーラはバスチーユに関する情報を本から得ており、これについて、ある程度の知識を持つことは確かだ。彼女は想像を働かせて、自分の置かれた環境をバスチーユに置き換えている。

バスチーユとは圧制の象徴であり、ルイ 14 世以降は政治犯が収容されていた。バスチーユの囚人の多くは信念を持って権力に立ち向かった人々である。セーラはプリンセスに憧れを抱くものの、地位に関係することなく、精神の持ちようという点から民衆側にも共感を寄せている。そして、このあとみていくように、フランス革命で民衆が王政を転覆させたように、最終的にセーラもミンチンの権威を意図せずにして覆すのだ。

ここまでみてきたように、『小公女』にはフランス革命に関係する記述がいくつもみられるが、この革命の最中に処刑されたアントワネットのどこにセーラは憧れを抱いているのだろうか。その答えは、以下に挙げる引用の中にある。

「何が起きても、変えられないものがひとつある。私がぼろをまとったプリンセスでも、気持ちはいつだってプリンセスでいられる。黄金の布のお洋服をまとっていたら、プリンセスでいることは簡単だけれども、誰にも知られずずっとプリンセスでありつづけるほうが、よっぽど大きな勝利だわ。マリー・アントワネットは牢屋に入れられたときには王座はなくなっていて、着ているのは黒いドレス一枚で、髪は白くなって、民衆はばかにし

て寡婦カペーと呼んだ。でも、もっと派手でも何もかもが豪華だったころよりも王妃らしかった。私はそのときのマリー・アントワネットが一番好き。わめいている群衆におびえなかったのよ。群衆よりも強かったのよ。首を斬られたときも」(バーネット 164 頁)^[1]

ナレーターは、上述のセーラの台詞への補足説明として、セーラのこの考えは新たな考えというよりも、かなり前からのものだと説明している。引用のセーラの言葉から、セーラとアントワネットの接点がどのような状況に陥ってもプリンセス以外のなに者にもならず、気高さを失わないところにあることが分かる。セーラが「誰にも知られずずっとプリンセスであり続ける方が、よっぽど大きな勝利だわ」と述べている通り、アントワネットは民衆から蔑まれてもプリンセスであった。この王妃は、有罪宣告が決まっている名ばかりの裁判で、不屈の精神力を示したのだ(ドラレクス 199 頁)^[2]。

『小公女』において名前の挙がるプリンセスはアントワネットだけであり、この王妃について言及される前の場面では、セーラは人々に物やお金を与える行為とプリンセス (a princess) を結び付けていた。恵まれた環境に置かれていたセーラは、プリンセス像を自ら創出して、他者に親切を施し、気高く振舞おうと努めていた。状況が悪くなると、17 世紀のフランス史に精通していたセーラは、アントワネットを自ら重ねて辛い状況に耐えるのだ⁹。アントワネットがどのような環境でも、プリンセスとしての誇りを失わずに気高く振舞ったように、セーラも自分をプリンセスだと思うことで、環境に屈せずに気高さを保ち続ける。

セーラがアントワネットに憧れを抱いたのも、この少女の根本にあるプリンセス以外のほかのものにはならないように (“I Tried Not To Be”) という思いに重なるからである。

3. 勸善懲悪

セーラは愛情深さや優しさを有する少女であるが、彼女に正義感もまた備わることが、ナレーターの台詞からも分かる。

誰かがいたたまれない思いや悲しい思いをさせられていたら、どんな戦いであろうといつ

だって飛び込みたくなるのだ。「もしもセーラが男の子で何百年か前に生きていたら」とセーラの父親はよく言ったものだ。「抜き身の剣を手に国じゅうをめぐる難儀している人たちを助けたり守ったりしたろうね。困っている人を見ると、必ず戦ってあげたくなるんだ」(バーネット 27 頁)¹⁾

この台詞は、ラヴィニアとジェシーにフランス語の失敗をくすくす笑われるアーメンガードについて、セーラが気の毒に思う場面で述べられている。クルー大尉にとってセーラは娘であり、リトル・ミセスでもあるが、彼は娘に備わる男らしい性質にも気付いていた。廣岡糸子は、セーラは時に沈黙を守って、表面上は従順を装っているようでもあるが、ここぞというときは自分の思うところをひろうして敵を欺く。踏みつけられることを決して許さない少女である(廣岡 142 頁)²⁾と指摘している。

セーラの性質を踏まえた上で、ミンチンとセーラの関係を見ていきたい。セーラとミンチンが互いに好いていないの明らかだ。第 1 章「セーラ」では、セーラはこの学院の家具をみにくいと感じ、それらがミンチンに似ているとのちに何度も思った(バーネット 6 頁)³⁾と記されている。第 18 章「ほかのものにはならないように」では、ミンチンが「わたくしはずっとあなたを大切に思っていましたよ」とトム・カリスフォードとカーマイケルを前にして話すと、セーラは「そうでしょうか、ミンチン先生?」「知りませんでした」(バーネット 277 頁)⁴⁾と情を込めずに返している。

ナレーターは、ミンチンがセーラを嫌っていると所々で述べているが、この教師はセーラのまなざしが特に嫌いなようだ。例えば、第 11 章「ラム・ダス」には次の通り記されている。

ラム・ダスと猿に会った翌朝、セーラは幼い生徒たちと一緒に教室にいた。授業が終わったので、セーラはフランス語問題集を集めながら、王侯たちが身をやつしていたときに強いられたさまざまな行動について考えていた。たとえば、アルフレッド大王はお菓子を焦がして牛飼いの妻に横っ面を張られた。この妻はあとで自分の粗相を知って、どんなにおびえたことだろう。セーラが——もう編み上げ

靴からつま先が出てきそうだが——プリンセスである——本物のプリンセスであると、ミス・ミンチンが知ったらどうなるだろう! そのときセーラの目には、ミス・ミンチンが一番きれいなまなざしがうかんでいた。ミス・ミンチンには我慢ならないことだった。 (バーネット 165-166 頁, 下線は引用者)⁵⁾

セーラは想像によって自らを慰めることで心を落ち着かせるが、それはセーラのまなざしにも表れる。ミンチンがセーラに怒りを覚えるのは、セーラの表面上に表れる反抗や、彼女の仕事に対する姿勢ではなく、セーラのまなざし、セーラの長所、換言するとセーラの内面から自然に溢れ出てくる彼女の性質である。セーラはミンチンの引け目を意図せずに示唆し、この女教師の怒りをかうのである。例えば、ミンチンはフランス語を話せないことがコンプレックスであり、フランス語の得意なセーラにムッシュ・デュファージュを前にして面目を潰されている(バーネット 23-25 頁)⁶⁾。

セーラはミンチンに彼女の弱みを刺激しているものの、この少女がミンチンに表立って反抗する姿は見受けられず、むしろ従順である。しかし、以下に挙げる引用では、セーラの胸中が記されており、セーラがミンチンに内心抵抗していることが明らかにされている。

ときどきミス・ミンチンは、厳しい、偉そうな訓示を垂れている最中に、セーラの子どものらしくないまなざしが自分に据えられ、誇らしげな微笑みがそこにこめられているのを見てとっていた。セーラが内心こう思っていることはわからなかったけれど、〈ご存じないでしょうけれど、プリンセスにももの言っているのですよ。その気になれば手のひと振りでわたくしはあなたに処刑命令だって出せます。大目に見ているのは、わたくしがプリンセスで、あなたはあわれで愚かで薄情でいやしくて、分別がないからです〉 (バーネット 164-165 頁, 下線は引用者)⁷⁾

セーラはミンチンの支配下に置かれ、この教師の機嫌次第では学院を追い出されて物乞いになるかもしれない、弱い立場にある。しかし、セーラは心の中でミンチンに勝っているのだ。セーラは自分

をプリンセスとする一方で、ミンチンのおろかさ、薄情さ、卑しさ、分別のなさを蔑んでいる。

この見解をさらに根拠付ける場面をみていきたい。セーラがラム・ダスとサルに出会った翌日、この出来事を思い出して小さい笑い声をたててミンチンを怒らせた場面において、ラヴィニアとジェシーが小付き合う様子を見たナレーターは、「ミス・ミンチンがセーラを攻撃するときにはなんだか興味がわく。セーラはいつも奇妙なことを言うし、ちっとも怖くなさそう」(バーネット 167 頁)¹¹と述べている。ミンチンの支配下に置かれて、重労働を強いられているセーラであるが、この少女の不屈の精神は負けていないのだ。

ミンチンは上流家庭の子女向けの学院を営んでいる点からも、商才に恵まれ、自立した女として描かれている印象を受ける。法律家のバロー・アンド・スキップワースもミンチンを実務家として認め、彼女の実情を見通せるくらいの抜け目なさを評価している(バーネット 93 頁)¹¹。だが、ミンチンの賢さは、最終的に悉く否定される。

ミス・ミンチンは賢明な女性ではなかった。極度に興奮し、悪あがきをして必死の手を打とうとした。いやしくて浅はかだったせいで失ったものをいやでも自覚させられて、愚かにもそれを取り戻そうとした。(バーネット 276 頁)¹¹

ナレーターは第 18 章「ほかのものにならないように」で、ミンチンが賢明な女性ではない(not a clever woman)ことを断言している。そして、この章で、ミンチンの立場が危うくなるのだ。セーラは父から財産を相続してプリンセスに返り咲き、新たな保護者カリスフォードに迎え入れられる。対して、ミンチンはセーラに学院の特別寄宿生という特権を再び与えると提案するものの、あっけなく断られてしまう。ミンチンはセーラを失うだけでなく、セーラが自らの受けた仕打ちを公言すれば、学院の名誉にも関わる事態を招いたと気付くのだ。

これまで従順であった妹のアメリア・ミンチンからもこの女教師は言い負かされてしまう。

「でも言いかけたからにはどんな目に遭おうと、しまいまで言うわ。あの子は賢くていい子だわ——あんたが少しでも親切にすれば必

ず恩を返したでしょうよ。でもあんたは少しも優しくしなかった。とどのつまり、姉さんには頭が良すぎる子で、そのせいで姉さんは、はじめからずっとあの子を毛嫌いしていた。あの子は私たちのこともお見通しだった——」(バーネット 280 頁)¹¹

アメリアは、姉にとってセーラが賢すぎた(too clever)と考える。アメリアはセーラについて、姉の冷酷な欲得ずくも、自分の気の弱さも、二人とも自分のお金の前ではへいこらしていることにも気付いていたと述べる(バーネット 280 頁)¹¹。

「妹はどうしようもなく愚かにみえるが、見た目ほど愚かでないことは間違いなく、だから時として爆発し、人が耳にしたくないような真実を口にすることもあるのだ」(バーネット 281 頁)¹¹と、ナレーターはアメリアの見解の正しさをサポートしている。

生徒や妹に絶大な権力を振るうミンチンが、クライマックスになって、セーラや妹にあっけなく打ち侵されてしまう。ここで注目したいのは、セーラの性質とミンチンの性質だ。セーラがもつゆたかな想像力、思いやりの心、愛情深さ、優しさ、必要以上にものを求めない自制心のどれも、ミンチンにもたない。作品終盤で、ミンチンの賢さが否定されることになるのも、彼女に欠ける優しさや想像力に関係すると考えられる。最終的に、ミンチンは、セーラから報復を直接下されはしないものの、面目をまる潰しにされるのだ。

4. 理像の女性像：良妻賢母としての役割を担うセーラ

セーラは幼いながらにして、父親のリトル・ミセスであり、ロッチェにとって母親代わりであるように、妻として母としての役割を担っている。セーラのハッピーエンドに着目すると、出版当時の少女たちにとってセーラの姿は指針とすべき少女の姿、あるいは少女たちに良妻賢母として振舞うべきことを暗に教え説いていると考えられる。

川端有子は、セーラが小さな奥さまに最終的におさまることになると考えている。

皮肉にも、一度はそのヒエラルキーに抵抗を示したセーラが、こうして父王の膝元に額づく王女、「小さな奥さま」に落ち着くことで、

既成の秩序は回復され、維持されることになる。母であり、妻であり、娘であるこの帝国のレディが、王の権力下にひれ伏しているのは明らかだ。貧しい人に糧を分け与えたいと、彼女は彼[カリスフォード]におうかがいを立て、「なんでもしたいことをしてもいいのだよ」とお墨付きをいただくまで、行動に出るわけにはいかず、パン屋の店を訪れるにも、彼に付き添われて、お出ましになるのだから。(川端 128-129 頁)^[4]

川端が指摘するように、クライマックスでセーラに与えられるポジションは、まさに19世紀のイギリスで理想とされていた女の在り方に重なっている。当時のイギリスでは、道徳や愛情深さを備えた女性、換言すると良妻賢母型の女性が理想とされていた。セーラが父クルー大尉にとって小さな奥さまであり、幼い生徒たちにとっては母親的存在でもあったことを考慮すると、当時理想とされていた女性像に通じているのは明らかだ。

クライマックスでは、19世紀の淑女たちが理想としていた結婚というゴールに重なるかのような位置に、セーラは就く。セーラは結婚適齢期に達していないこともあり、結婚はしないものの、賢さを活かして人生を主体的に切り拓いていこうともしない。カリスフォードにとってセーラは保護の対象であるばかりではなく、彼にとって相棒(companion)と見做されているのは興味深い。ここには、セーラとクルー大尉の関係のように、もつれあいの関係を窺える。つまり、セーラがカリスフォードの妻としての役割も担っていると見做せるのだ。

セーラは学院の使用人としての過酷な暮らしを通して、金銭や境遇に恵まれない人たちの暮らしを身をもって知る。自分の属している優雅であたたかな世界から離れて、実体験を通して厳しい世界を知り得た。カリスフォードの家で暮らすある日、この紳士に「ありがとう。おなかが空いているってどういうことか、私、わかるんです。真似事をして忘れられなくなると、とてもつらいんです」(バーネット 290 頁)^[4]と話す。セーラは自分に親切を施してくれたパン屋のおかみに、天気の良い日にはお腹のすかせた家のない子たちに焼きたてのパンを渡してほしいとお願いする(バーネット 292 頁)^[4]。他者の痛みを知るからこそ、

相手の立場に立てることは、セーラが「おなかがぺこぺこになるのがどんなことか、あなたはよく知っているから、やってもらえるかしら」(バーネット 294 頁)^[4]と、子どもたちにパンを渡す役割をアンに頼む台詞にもいえる。

ここで着目したいのは、セーラはあくまでも中流以上の階層に属する子女であり、下層の人々とセーラの間にかかれた境界線である。セーラからミンチン女子学院での空腹時の話を聞いたカリスフォードが、「ああ。そうだ、そうだと。そう、そのとおりだね。そのことはなるべく忘れなさい。さあこちらへ来て、その足載せ台に座って。自分はプリンセスだということだけ覚えていなさい」(バーネット 290 頁)^[4]と述べると、「ええ」と返事をするセーラに、階層間の隔たりを明確に読み取れる。セーラはあくまでも中流層以上の子女として作品で扱われており、空腹とは無縁の立場に置かれているのだ。

おわりに

セーラは、「もしも私がプリンセス——本物のプリンセスだったら、民衆にお金や物を与えられるのに」(バーネット 64 頁)^[4]と想像を巡らせる。セーラは恵まれた環境におかれていた時には、自分の中で理想とするプリンセス像を創り上げていき、その姿を手本とし、気高い振る舞いに努めていた。セーラの環境が悪い方へと一変すると、周囲から蔑まれてもプリンセスで在り続けたフランス王妃アントワネットに自らを重ねて、気高さを保持しようとする。最終的に、人々にあたたかい眼差しを注ぐプリンセスに返り咲いた。

セーラの性質である良妻賢母型とミンチンの性質である薄情な商才型が、『小公女』では対比的に描かれている。クライマックスにおける二人の異なる成り行きから、どちらの性質の女が作品で肯定されているかは明らかだ。ここには、プリンセスに返り咲くセーラと面目を失ったミンチンというように、勧善懲悪の教訓を読み取れる。『小公女』は当時の少女たちに理想的な少女像、あるいは目指すべき女性像を教え説いていると解釈できる。

『小公女』を映画化した『リトル・プリンセス (A Little Princess)』(1995)では、勧善懲悪の教訓が原作以上にありありと描かれている。『リトル・プリンセス』はストーリーの大部分が原作と異なり、登場人物の名前も一部変更されているものの、

原作における重要なテーマは上手く汲み取られている¹⁰。映画のクライマックスでは、愛情ゆたかで思いやりあふれるセーラは父と再会を果たし、学友たちに名残惜しまれながらもインドに帰る。対して、ミンチンは煙突掃除婦となり、かつて無慈悲に扱った煙突掃除の少年の下で働いている。

前述したように、『小公女』においてセーラはミンチンに表面上は抵抗しないものの、内心では抗しているのだ。フランス革命において民主が王政を覆したように、セーラの立派な精神はミンチンの権威をおのずと覆した。ここから、商才に長ける無情な女よりも、良妻賢母型の女が『小公女』で支持されているといえよう。

『小公女』はセーラのハッピーエンドで幕を閉じるが、その幸せとは出版当時に理想とされていた女性像の枠組み内にある。セーラは賢く、器用であり、物事に前向きであるものの、人生を自力で歩もうとはせず、カリスフォードの保護下に置かれ、彼とともに暮らすことになる。ここには、ジェンダーロールが明確に表れており、セーラのハッピーエンドとは出版当時のティピカルな女性の幸福観に重なるものといえる。21世紀においてもなお『小公女』は色褪せることなく読み継がれているものの、女性の自立や独立が促されている今日的視点でみると、この作品は少々古臭く捉えられるかもしれない。

注

¹ 本稿における『小公女』の引用の翻訳は畔柳和代による。

² 村上リコの『図説 英国社交界ガイド』¹⁵⁾によると、19世紀において多くのエチケット・ブックが出版された。村上は「エチケットが社交界を「下品な人たち」から守る壁となり、また壁を通り抜ける合言葉ともなったのだろう」(村上20)¹⁶⁾と述べている。この本によると、社交界では人付き合いの規則も明確であり、付き合いの開始も、継続も、深めていくかどうか、格上の人の判断によったという。

³ 例えば、ベッキーにお話を聞かせることを厭わないセーラに、ラヴィニアが「そうねえ。あなたが召使いにお話を聴かせるのをあなたのママがお喜びになるかどうかは知らないけれど、私がそんなことをするのを私のママは喜ばないわ」と言う場面がある(バーネット54頁)¹⁷⁾。

⁴ 第2章「フランス語の時間」で、ナレーターに

よって「立派な小さな人 (very fine little princess)」(バーネット19頁)¹⁸⁾と、セーラは評価されている。

⁵ 例えば、セーラは衣類を抱えて廊下を歩いていると、久しぶりに会ったアーメンガードに「い、いまものすごく不幸せ？」と無神経な質問をされている。セーラはその場を急いで離れるが、その時にとった友人へのそっけない態度について、「かわいそうなとろいアーメンガードを気が利かないからといって責めてはならないとわかっただろうに」(バーネット116頁)¹⁹⁾と後になって考えた。このように、セーラは怒りを引き起こした原因を考えて、感情をコントロールしようとしている。

⁶ セーラは第11章「ラム・ダス」で、「何が起きても、変えられないものがひとつある。私がぼろをまとったプリンセスでも、気持ちはいつだってプリンセスでいられる。黄金の布のお洋服をまとっていたら、プリンセスでいることは簡単だけれども、誰にも知られずにずっとプリンセスでありつづけるほうが、よっぽど大きな勝利だわ」(バーネット164頁)²⁰⁾と述べている。

⁷ セーラをねたむ子たちは、セーラを特に侮蔑したいときに「プリンセス・セーラ」を用い、一方セーラ派はそれを愛称として仲間内で使っていた。

⁸ ロッティがセーラを母親のように慕うこと(バーネット41頁)²¹⁾、セーラが取り巻きを増やした理由に彼女の語るお話も関係すること(バーネット50頁)²²⁾、ベッキーはケーキと暖炉の火を前にしてセーラのお話を聞いた時、何よりもセーラによってあたためられたということ(バーネット64頁)²³⁾からも、セーラの内面のゆたかさが周囲を惹き付けているといえる。

⁹ ミス・ミンチンは「ほかの子だったら気持ちだって意志だってすっかりへりくだって屈したはず——あの子が従うしかなかったいろんな——いろんな変化によって。でもあの子はちっとも沈んでいない。まるで——まるで——プリンセスみたいに」(バーネット248頁)²⁴⁾と述べている。ここから、『小公女』におけるプリンセス像の1つには、自分の運命に屈しない強さや、どのような状況でも失わない気高さもあると考えられる。

¹⁰ 『リトル・プリンセス』の冒頭で、セーラはマヤから「女は生まれた時からプリンセスなのよ」(クアロン0:2:38)²⁵⁾と教わっているように、セーラが自分をプリンセスだと思う気持ちが映画全体に流れている。注目すべきなのは、セーラが屋根裏部屋に訪れた生徒たちと遊んでいると、ミ

ンチンが現れ、セーラとベッキーに厳しい罰を宣告する場面だ。ミンチンは「お姫様の気分での」(クアロン 1:10:49)^[6]とセーラに詰問すると、セーラは「あたしはお姫様よ。女の子だもの」と答える。続けて、「屋根裏に住んでいても、ボロを着ていても、不細工で年を取っていても、女はみんなお姫様だわ、お父様に教わったでしょ？」(クアロン 1:11:26)^[6]と述べる。この発言を聞いたミンチンは屋根裏部屋のドアの鍵を閉めた後、深く悲しみ、こぼれ落ちる涙を手で拭う(クアロン 1:11:54)^[6]。この場面は映画オリジナルであり、原作でも映画でもミンチンと父親の関係は言及されていない。だが、セーラがミンチンのふれられたくない部分を刺激したのは確かであろう。

引用文献

- [1] Burnett, Frances Hodgson. *A Little Princess*. Puffin Books, 2008. (=畔柳和代訳. 小公女. 新潮文庫, 1905.)
- [2] ドラレクス, エリーヌ, ニコラ ミロヴァノヴィチ, マラル, アレクサンドル, マリー・ア

- ントワネット : 華麗な遺産がかたる王妃の生涯. 岩澤雅利訳, 原書房, 2015. p.206, 199.
- [3] 廣岡糸子. 大胆不敵な女・子ども : 『小公女』『秘密の花園』への道. 燃焼社, 2003. p.142.
- [4] 川端有子. 少女小説から世界が見える. 河出書房新社, 2006. p.128-129.
- [5] 村上リコ. 図説 英国社交界ガイド : エチケット・ブックに見る 19 世紀英国レディの生活. 河出書房新社, 2017. p.20.

映像資料

- [6] クアロン, アルフォンソ (監督), リトル・プリンセス～小公女～. ワナー・ホーム・ビデオ, 2000.

付記

本稿は、オンライン・カルチュラルスタディーズ学会 2020 (2020 年 11 月 28 日/オンライン) で発表を行った原稿に加筆と訂正を加えたものです。

(受付日 : 2021 年 1 月 15 日, 受理日 : 2021 年 7 月 19 日)



西田 梨紗 (にしだ りさ)

現在 : 大正大学大学院文学研究科 (博士後期課程在学中)

専門はアメリカ文学. ヘンリー・D・ソローを中心に, アメリカン・ルネサンスについて研究を行っている。

主な論文 : ベトナム戦争下で蘇った“Different Drummer”の精神—The Night Thoreau Spent in Jail におけるエドワードの役割を中心として. 年報カルチュラル・スタディーズ. 2019, (7), p.95-116. 白いスイレンの象徴性をめぐって. ヘンリー・ソロー研究論集. 2019, (45), p.11-21.